

読者へのメッセージ

ヨコハマに水族館を

総務局 伊藤 勇

ヨコハマと言えば「ミナト」のイメージがすぐに浮かんでくる。ヨコハマは、東京湾に面している。

東京湾は、近年水質が良くなってきていると言われているが、夏になれば海は赤茶に染まり、特に港周辺の水は汚い。一方、魚類について言えば、乱獲等による減少、小型化が見受けられる。

それでも、東京湾はいまだ魚の種類が豊富で、ハゼ、アイナメ、カレイ、スズキなどの「江戸前」と呼ばれる新鮮な魚を私たちに提供してくれている。

私は、これら魚類の研究・保護・育成を図り、かつ、社会教育活動の場としての水族館がヨコハマにも必要であると考えている。

先に、東京都の荒川河口に都立水族館を建設する計画がまとまった。この水族館は、魚種が三〇〇種と、他の施設に比べて多いとは言えないが、コモリウオ、メルルサなどの珍魚や、ラッコなどの珍獣が飼育される予定であると言う。また、油壺、江の島、池袋の水族館にも、通常私たちがお目にかかれない珍魚・珍獣が飼育されており、楽しませてくれている。

しかし、近年「魚離れ」の傾向があるとされているが、身近な魚でも名前すら知らない人が多い。そこで、地味ではあるが、ヨコハマに是非とも「江戸前の魚」を中心とした水族館を建設してほしいと思う。

このような水族館が市内にあるということは、市民が海を身近に感じることにになり、ひいては、ミナト・ヨコハマに対する理解を深めることにつながるのではないだろうか。

読まず嫌い

教育委員会 鎌田美恵子

思いがけない人からの紹介でこの一文を書く羽目になってしまったが、締切間際になっても一向にペンが進まない。「調査季報」をまともに読んだことのない人間に、「読者のページ」を書かせようなど、暴挙というものである。……

「調査季報」は職員が自由に意見を発表し討論する行政研究誌で（このページの投稿規定を参照のこと）、毎号いろいろなテーマが取り上げられている。が、自分の仕事や職場に関係のありそうなテーマでないと、なかなか読む気にはなれない。なにしろ、目次にはカタい感じのタイトルが並んでいるし、ページを繰れば小さな活字がぎっしり。軽薄短小、マンガ世代の身としては、思わずおそれをなして、丁寧にお願いすることになる。

しかし、今度ばかりはそうも

いかず、最新号の特集「都市とイベント」を読んでみることにした。自分の仕事や興味とは無縁といえるテーマであり、専門用語に手こずったりもしたが、意外に興味深く読むことができた。今まで知らなかった世界を見つけた時の新鮮な感じ、ともいえるのだろうか。仕事からみの興味で読んだ時よりも強い印象を受けた気がする。特に「かわを考える会のドブ川イベント」と「ヨコハマ映画祭」の話は生き生きと書かれて親近感が持て、考えさせられること

が多かった。これをきっかけに、「調査季報」と親しい関係になりたいと思う。次号がこの思いに添えてくれると信じて、その発行を待ちたい。

「調査季報」は職員が自由に意見を発表し討論する行政研究誌です。「行政研究」への投稿も歓迎します。二〇〇字詰五〇枚以内。都市科学研究室まで（電話六七一一〇二九）。

この「読者のページ」へもご投稿ください。市政、都市問題、自治体問題等、題材は自由。七〇〇字以内。

△あとがき▽

現在、本市では自立的都市形態をめざした産業政策の一方策として企業誘致活動が活発に展開されている。

しかし、そこには国の産業配置政策との乖離、企業誘致をめぐる都市間・地域間競争の激化、市の都市計画・都市づくりとの整合性・総合性の確保など解決困難な多くの課題が存在する。だが、横浜の現状を考えるとこのような難問を切りくずし、企業誘致活動をさらに積極的に推進し、他の地域経済振興政策と連携して、横浜経済の総合的活性化に努めるべき必要性が痛感される。

一方、アメリカの代表的な研究開発型産業コンプレックスであるシリコンバレーで、ハイテク企業による土壌・水質汚染が問題となっていることが最近の新聞で報道された。このような外部不経済についても万全の配慮・対策を講じつつ、市民の福利向上をめざした産業政策を進めなければならない。△長尾▽